

諸外国の公文書館

2003年5月からの約半年間、内閣府大臣官房長のもとに「歴史資料として重要な公文書等の適切な保存・利用等のための研究会」が開催されていました。現在の国立公文書館長である高山正也氏をはじめとする有識者7名で構成される研究会の開催は、福田康夫元首相（当時・内閣官房長官）の強い意向をうけたものでした。研究会の成果は、「中間取りまとめ」（同年7月）および「諸外国における公文書等の管理・保存・利用等にかかる実態調査報告書」（同年12月）として公表されています。

後者の「報告書」では、韓国、中国、アメリカ、カナダにおける国立公文書館制度について、実態調査を踏まえた分析がなされています。右の図表は、「報告書」にある各国公文書館の概要からキャッチフレーズ的な表現を抜き出したものです。これらの表現には、歴史に対する各国の基本的な考え方が反映されており、現在さらには未来への拠りどころとして歴史的記録（公文書等）を重んじる姿勢が読み取れます。

なお、同研究会の活動により、日本の公文書館制度の整備が国際的に大きく立ち遅れていることが明らかにされ、その後の国立公文書館整備や公文書管理法（本連載 No.4 参照）制定に向けた流れが生み出されました。



韓国
（政府記録保存所）

- * 情報が集まるところ
- * 歴史が息づくところ
- * 未来が見えるところ



中国
（国家档案局）

- * 人類社会の各種活動の真実の記録
- * 国家と社会の歴史の真実を守り抜く重要な事業
- * 人類の文化遺産の重要な構成部分であり、社会文明の進歩の拠り所



アメリカ
（国立公文書記録管理局）

- * 過去は未来への始まり
- * 過去に学べ
- * 過去の遺産は将来の実りをもたらす種子である
- * 永遠の警戒は自由の対価である



カナダ
（図書館・公文書館）

- * 記録されたカナダのメモリーを保存し、国民に公開することで、国民の権利を守り、カナダへの理解を深める

※写真は、「報告書」または各施設ウェブページ等による。